

# 四国八十八ヶ所について

**四**国八十八ヶ所は、四国にある空海（弘法大師）ゆかりの88か所の仏教寺院の総称で、四国霊場の最も代表的な札所である。他に「八十八箇所」「お四国さん」「本四国」などの呼称がある。

四国八十八箇所を巡礼（巡拝）することを四国遍路、また四国八十八ヶ所霊場会では「四国巡礼」といい、他に「四国巡拝」などともいう。

阿波国（現・徳島県）の霊場は「発心の道場」で23か寺、土佐国（現・高知県）の霊場は「修行の道場」で16か寺、伊予国（現・愛媛県）の霊場は「菩提の道場」で26か寺、讃岐国（現・香川県）の霊場は「涅槃の道場」で23か寺が、88の霊場寺院の打ち分けである。

なお、他の巡礼地と異なり、四国八十八箇所を巡ることを特に遍路といい、地元の人々は巡礼者を「お遍路さん」と呼ぶ。また、札所に参詣することを「打つ」と表現する。そして、霊場寺院を結ぶ歩き道を遍路道といい、八十八箇所を通し打ちで巡礼した場合の全長は1100～1400km程である。距離に幅があるのは遍路道は一択ではなく、選択する道により

距離が変動するためである。自動車を利用すると、打ち戻りと呼ばれる来た道をそのまま戻るルートや遠回りのルートが多いので、徒歩より距離が増える傾向にある。一般的に、徒歩の場合は40日程度、自動車や団体バスの場合では8日から11日程度で一巡できる。さらに、高速道路の整備により、最短で巡拝する熟練者は5日で1巡する。

## ●参拝方法

遍路（巡拝者）は札所に到着すると、およそ決められた手順（宗派や指導者によって多少異なる）に従って参拝する。それは、山門前で合掌礼拝一礼し、手水舎でお清めをしたのち、表示などで可能であれば鐘楼堂にて梵鐘を一回突く（参拝後には突かないこと）。

そして、本堂において燈明・線香・賽銭奉納をして納札を納める、また、写経を納めることもある。続いて般若心経や本尊真言、大師宝号などの読経を行い、祈願する。

次は大師堂に向い燈明・線香・賽銭奉納をして納札を納め、般若心経や大師宝号などの読経を行い、



33 番札所 雪溪寺



36 番札所 青龍寺

祈願する。なお、最近は唱える者は希になったが本堂では寺の御詠歌を、大師堂では弘法大師の御詠歌を唱える。

その後、境内にある納経所にて、持参した納経帳や掛軸や白衣に、札番印、宝印、寺号印の計3種の朱印と、寺の名前や本尊の名前、本尊を表す梵字の種字などを墨書してもらい、各寺の本尊が描かれた御影（おみえ）を頂き、納経料を支払う。この一連の所作を納経という。なお、納経帳への納経は一人につき1冊で、同時に掛け軸も1幅、白衣も1着ずつであり、一日に一度限りである（翌日以降なら可能）。白地に黒印字の御影は漏れなく頂けるが、カラー御影は、別途有料で販売している。

最後は山門前にて合掌礼拝一礼し、次の札所へのお参りとなる。

八十八箇所を全て廻りきると「結願（けちがん）」となり、どの札所から初めてもよいので88番目の札所が結願寺となる。

## ●装束・持ち物

### 白衣（びやくえ）

笈摺（おいずる。おいずり）とも呼ばれる。巡礼者が着用する白い着衣。四国八十八箇所の寺院や門前の店で購入すると、弘法大師を表す梵字と「南無大師遍照金剛」と背中に書かれたものが一般的である。袖があるものを白衣、袖無しのものを笈摺とする説明もある。宝印を受領



するためだけの実際には着衣しない白衣は判衣とも呼ばれる。巡礼の途中でい

つ行き倒れてもいように死装束としてとらえる説もあれば、巡礼といえども修行中なので清浄な着衣として白を身につける、どんな身分でも仏の前では平等なので皆が白衣を着るとする説もある。

四国では、全ての札所で判を戴いた判衣を亡くなったとき着せて送り出す風習があり、その判衣を着て遍路をする者もいるがそれは自由である。なお、霊場会では、（作務衣の上に白衣を着たとしても）作務衣やジーパンでの遍路は好ましくないとされている。

### 輪袈裟（わけさ）

輪袈裟は袈裟の略式で、遍路には欠かせない法衣である。トイレに行くときや食事の際は外すのが決まりで、着けたままだと見知らぬ先達であろうが注意されることがある。しかし、くれぐれも用を足した後に忘れて行かないように。

### 金剛杖（こんごうづえ）

木製の杖で、空海が修行中に持っていた杖に由来する。巡礼者が持つ金剛杖は弘法大師の化身ともいわれるほどで、宿に着いたら杖の足先を清水で真っ先に洗い、部屋では上座や床の間に置くなどの扱いをするのがならわしである。

巡礼中、行き倒れた巡礼者の卒塔婆として使用されたといわれる。市販されているものは「同行二人」「南無大師遍照金剛」や頭部に「地」「水」「火」「風」「空」の五輪を表す梵字が書かれ、頭部の五輪は

直接手で触れない様に金襴を巻いて持つ、般若心経が書かれているものもあり、橋の上ではついてはならない。

**菅笠 (すげがさ)**

日光や風雨から頭部を守る。笠には「迷故三界城」「悟故十方空」「本来無東西」「何処有南北」と「同行二人」と梵字が書かれている。梵字が前になるようにかぶるのが一般的。

遍路笠を身につけた巡礼者は、境内で笠を脱がないでお参りすることが許される。堂内でも履物を脱がない外陣の土間の部分なら笠を脱ぐ必要はない。読みは「迷うが故に三界は城、悟が故に十方は空、本来は東西は無く、何処に南北有らん。」。

**納札 (おさめふだ)**

札所などにお参りし、納経した証に収める札。般若心経を写経したものを納める(経を納める)のが正式とされているが、読経したのちに自分の名前を書いた納札を納めてもよい。衛門三郎が自分が空海を探しているということを空海に知らせるために(空海が立ち寄ると思われる)寺にお札を打ちつけたのが始まりとされる。かつては木製や金属製の納札を山門や本堂の柱などに釘で打ちつけていた。このことから、遍路自体や、札所に参拝したことを「打つ」ともいう。

現在では、お寺の建築物の損傷を避け、持ち運びの利便性を考え、紙製の納札を納札箱に入れることになっている。また、接待をしてもらったら、その人にお礼の気持ちも込めて納札を渡すのが決まりである。結願した回数によってお札の色が変わる。1 - 4回が白、5 - 7回が緑、8 - 24回が赤、25回以上で銀、50回以上で金、そして100回以上で錦の札となる。なお、それらの色札を使える回数になっても白の納札を使ってもよく、100回以上回っても白の納札を使う人もいる。

四国八十八箇所 全札所位置図  
Shikoku Pilgrimage 88 Temples Map

